

はじめに

消化器疾患といえば脾・胃（中焦が中心である。

おもな病証

胃痛、胃部膨満感（心下痞）… 胃腸の熱が外発しよ一として おこる。

腹痛、腹満（腹部膨満感）… 臍を中心とした膨満感… 胃炎、胃潰瘍、胃下垂症、十二指腸、潰瘍、膵炎、腸炎、虫垂炎、腸閉塞、イレウスなど。

嚥下困難（いつかく）… 中・下焦の冷え。上焦には熱がある… 胃ガン、逆流性食道炎などで酸性胃、内容物の逆流により下部食道に炎症がおこる。

・気げっぷ、呑酸… 過食、過酸症… 胃潰瘍、胃炎、胃アトニー、胃下垂症などにあらわれる。

胸やけ（そーざつ）… 過酸症、早食い、過食。

吃逆、胃の冷えにたいして陽気の発動による。

下痢、便秘。

1 痰飲について

上記した病証のほとんどが人体の陽気不足。特に脾胃の陽気が不足して水穀を消化腐熟吸収できないためにおこるものである。

1. 後天の元気

・胃は「水穀の海」「五臓六腑の海」などとよばれているように、水穀を腐熟して和降作用により小腸に運ぶ。

・小腸はそれをうけて必別清濁して、精微物質を脾におくり糟粕を降濁作用により大腸におくる。

・脾は中州脾土は中央というように、脾は五臓の中央に位置し、小腸より運ばれた精微を運化して胃の気（気血・津液・衛気・営気）として経絡を介して全身に送り出し、自分も含めて他の四蔵を養っている。

・余った水液は、肺、腎、三焦の気化作用により汗や尿として排泄される。

・この水をめぐらせたり、汗や小便にして出す役目は陽気（衛気・営気）がする。

・この陽気が不足すると水が滞って痰飲となる。

・これに内因、外因、不内外因など各種の病因が加わり胃腸疾患を引き起こす。

――脾と胃の関係――

脾は燥をよろこび湿をにくむ。 胃は潤をよろこび燥をにくむという性質を示すように水質との関わりが大きい。

また生命維持にかかせない入力と出力の中核をなしている。

問診における三種の神器ともいえる睡眠、食欲、二便の状態に深く関与している。

では、脾を働かす原動力は何かというと、それは相火・心包の相火、命門の火・元陽、腎陽である。

したがって先天、後天どちらも生命維持にはかかせないものであることは今までの学習で周知の通りである。

ただ本会がすすめる臨床の現場から考えるならば、衛気、営気の生成の根元である脾・胃が重要である。

2 痰飲の種類

1. 痰飲（広義）が停留する部位による種別（金匱要略）

停留する部位により痰飲、懸飲、胃飲、至陰の別がある。

痰飲咳嗽病脉症とあるように痰飲は脾と肺の機能低下が中心である。

(1) 痰飲

水飲が胃腸に停留したもの。脾と肺の機能失調。
陽気が補われると痰飲が動き、胃腸がぐるぐるとなる。
素問痰論に「脾は身の肌肉をつかさどる」とあるように脾虚になると痩せてくる。

(2) 懸飲

水飲が脇下に停留したもの。
肺・肝・三焦の失調。
胸の陽気（宗気・肺気）不足。
三焦の機能失調… 気・火・水が巡らない。
水穀の道路（31難）といわれている。
足厥陰肝経は、肝に属し胆をまとい、横隔膜を貫いて胸肋部に分布し、その支脈は肝よりわかれて横隔膜を貫いて肺に注いでいる。水飲が胸下に停滞すると、肝と肺の気機が失調し、水飲が肺をおかして、肺気がおりなくなるので、咳嗽が出現し、喀痰が閉ざされる。咳をすると気が動き引きつり痛む。

(3) 胕飲

水飲が四肢に停留したもの。
脾と肺の機能失調。
脾の機能失調により水が筋肉に氾濫する。
肺気（衛気）の機能失調により発汗されず膀胱にも運ばれないために四肢に氾濫する。
体重く四肢おさまらず。

(4) 支飲

水飲が胸郭内に停留したもの。肺と心との関係。
水飲が胸郭に停滞すると、肺の宣発と肅降を主る機能が失調するので、咳嗽が出現して肺気が上逆し、ものに寄りかかって起坐呼吸をし、息切れし身体は浮腫状態になる。

2. 病因による種別

―― 5 痰 ――

風痰… 湿が肝経にある。 熱痰… 湿が心経にある。 湿痰… 湿が脾経にある。
気痰… 湿が肺経にある。 寒痰… 湿が腎経にある。

―― 5 種の痰 ―― (張子和)

風痰… 風邪に感受したもの。
寒痰… 寒涼に侵されたもの。
熱痰… 熱い物を食べたとき。厚着（火が盛んとなり肺金を攻める）
湿痰… 陰をとどめて散らさない。
気痰… 意志に逆する事によってなる。
味痰… 酒醪など、厚味の物によってなる。
酒痰… 過飲により損傷されたもの。
食痰… 飽食により損傷されたもの。

これらは、脾虚により痰飲があるところに各種の病因が加わったものである。

治療法は、その痰を本とし、共存している気を標とする。

3 病証（寒熱による）

脾と胃は表裏の関係にあるため互いに影響を及ぼしあうが、一般的には胃病は実証、熱証が多く、食欲減退を伴う。脾病は虚証寒証が多く食後の腹脹を伴う。

4 腹証

積… 五臓に生じる陰気。血の累積。沈み伏せる。痛みは動かない。実積で重症。治

療は瀉法。

聚… 六腑に成る。陽気。気が集まる。ういて動く。痛みに根本無し。虚聚で軽症。
治療は補法。

積聚以外で腹に触れるもの。

――杉山流三部書による――

積聚以外で腹に触れるものは胆と食積と死血（𪗇血）なりとある。その部位は

- ・右… 食積。痛みは強いが、便通により軽くなる。
- ・中… 痰飲。痛みは間歇性である。
- ・左… 死血（𪗇血）痛みは動かない。

――杉山流三部書による腹痛鑑別――

- ・寒邪… 面々として痛み、痛みに増減無し。
- ・熱邪… たちまち痛み、たちまち止む。
- ・宿食… 腹痛み、下れば楽になる。
- ・死血（𪗇血） 痛むところがかわらない。
- ・湿痰… 小便利せずして痛む。
- ・痰… 腹引きつり胸下張る。
- ・虫… 痛んだり止まったりして、面白く唇紅い。

5 治療

脾の経絡は気をめぐらし血をまとめる。気がめぐると津液も流通する。

脾・胃が充実し気血が盛んであれば痰飲は生じない。

したがって痰の治療は脾土を補い脾湿を乾かしてその根本を治すことである。

――杉山三部書による治療――

痛むときは腹には治療せず、足から治療する。

中焦、脾・胃の気、後天の元氣、胃の気を補うのが先決である。

――寒熱による選穴――

寒痰… 金穴→榮気を補いあたためる。 土穴→気 血 津液の製造元を補う。

熱痰… 火穴→引き締め流す。 水穴→腎に戻し膀胱から排泄。

次に、症例を三題あげる。いずれも治療に苦慮（失敗）したものを取り上げて皆様のご批判を仰ぎたい。

6 症例

1. 食欲異常

患者… 78歳 女性。

初診… 平成14年7月13日。

主訴… 腹痛、食欲不振、風邪気味。

問診… 脉診 切経を行いながらその他の病症をうかがうと次から次へと自らが作り出しているともいえる病の間屋である。

病院では、逆流性食道炎といわれた。胸につかえた感じがあり嚥下困難を訴える。

年中風邪気味で毎日のように点滴を行っている。1年間で7キロやせたという。ルル3錠の愛好者。

寒熱の調整が悪い。切経すると汗をかいているが本人は寒がりである。

二便… 下痢、便秘の繰り返し。

全身倦怠感、寝付きが悪い。

咽喉痛、口渇、口内炎、鼻閉、目眩、肩こり、腰痛。

腹診… 大腹、小腹共に膨満している。中かんの部に抵抗と圧痛がある。

左右の季肋下にも軽い抵抗と圧痛がある。

右天枢、大横穴の下に軟結あり。

切経… 脾経、心包経の圧痛。

背候診… 脾俞、胃俞は喜按。右膈俞、胆俞付近は拒按をていする。

脉状… 沈、弦、虚→痰飲による。

証決定… 脾虚陰虚証。

—治療—

本治法→ 太白、大陵、三里。

標治法→ 中かん、天枢、趺陽、承満、関元、膈俞、胆俞、脾俞、胃俞。

灸… 脾俞、胃俞、足三里。

皮内針… 中かん。

点滴の中止と規則正しい食事を指示し、治療終了。

二回目、翌日

同様の治療を以下一日おきにおこなう。

考察… 風邪薬、胃腸薬はいまだ放せないようだ。

食欲異常 調子がよいと過食、早食いで腹痛、下痢を繰り返す。

点滴はしばらくの間おこなっていなかったが、最近肝臓が悪いとまたおこなっているようである。

治療も「先生ここに鍼して、灸して」と哀願する。

鍼を行うと丁子が良いからと現在も来院していますが、自ら病気を作り出す大変治療しにくい患者です。皆様はこのような患者にどう対処していますか。

2. 嘔吐の症例

患者… 72歳 女性

初診… 平成15年1月18日

主訴… 嘔吐、胃痛、頭痛、発熱（7.2）

問診… 昨夜、食事後腹痛、嘔吐する。

食欲… まったくなし。

唾液がでてきて気持ちが悪い。下痢はない。顔色青白い。

腹診… 大腹、小腹全体に軟弱ではあるが膨満してどこを按压しても気持ち悪い。

中かんには抵抗圧痛ともにある。

臍の部で表は熱。裏は寒である。

切経… 三陰交、地機、梁丘に圧痛。

背候診… 膈俞、肝俞、三焦俞、胃俞付近に硬結あり。

脉診… 沈、細、虚で数

右関上は細く浮いている。胃の熱であろう。

証決定… 脾虚胃熱証。

脾虚で痰飲があるところに悪い食べ物が加わり、胃熱となっているものである。

—治療—

応急処置として本治法の前に右裏内庭の圧痛に50荘。顔色良くなる。

本治法… 右大陵、太白、少陽

標治法… 腹部では中かん、水分、関元、趺陽。足では丘墟、飛陽、趺陽。

知熱を適宜行い、臍に知熱大灸を施す。

2回目 1.20 月曜

嘔吐、微熱は消失したがまだ食欲が十分でない。

本治法… 大陵、太白、商陽。

標治法… 先回とほぼ同様

裏内庭の灸はしない。

臍には、知熱大灸を行う。

3回目 1.21

前回と同様の治療を行い養生を指示するが来院しない。

2.15土曜

前回はあれですっかり良くなった。今回も同じような症状で嘔吐はないが戻しそうで気持ちが悪いと訴える。

脾虚陽虚で治療する。

現在も未病治のために来院中。

3. 胃ガンの症例

患者… 66歳 女性

この患者は、以前より腰痛、足のほてり、口渇、胸焼けなどを主訴として腎虚陰虚証で、時々治療している患者である。

口渇を防ぐためか、それともたばこの量を減らす為か飴をなめていることが多い。

健康には日頃から神経を遣い食欲にも大きな変動はなく、下痢、便秘などもない。

ご主人が7年ほど前に脳梗塞で倒れ、その後食道動脈瘤、肺ガンを経過し、去年の5月に見送った矢先である。病院にも通院しており、安心していた。

今回の異変に気が付いたのは平成14年7月16日であった。

主訴… 食欲不振、上腹部不快感、胃部圧迫感、膨満感。

腹診… 大腹、小腹共に膨満。

左季肋下にゴリゴリした圧痛が触れる。まさに、荒縄に触れるが如く、積（シャク）そのものである。

切経… 曲泉から上の肝経に圧痛がある。

左飛陽、右下委陽、飛陽、跗陽に圧痛。

腹臥位で足の指先が開くのが特徴。

背候診… 左脾俞付近が枯燥して色が悪く虚按を呈する。

右肩甲骨内側下角、神堂・胃脘付近から頸筋にかけての凝りがある。

脉診… 沈、細、しょく、実

証決定… 脾虚肝実

—治療—

1回目 7. 16

本治法… 太白、大陵、光明、行間

標治法… 日月、期門、中かん、天枢などに適宜補鍼。

左季肋下の積むの周囲にも軽く補鍼。

背部では脾俞、胃俞、膈俞、肝俞。

右肩甲骨内側の硬結に営気の補。左脾俞付近に刺絡（吸角）。関元に灸頭針。

病院で検査することを指示する。

2回目 7. 19

腹部膨満緩和、消失。積は残る。

治療は前回同様。

以後8月10日まで7回治療。その間に病院で検査、ガンと診断される。

開腹手術を行うが腫瘍の部分が深くて切除することが出来ないとして閉じてしまった。

退院後11月18日より現在も週に1回ほど脾虚肝実証、ときに腎虚肝実証でちりょうしている。現在積はない。

体重も入院時4キロほど減少したが現在はベスト体重に回復している。

本人もガンであることを承知しているが体調が良く、これで治ると信じている。

終わりに

胃ガンの患者は私のところに時々通院している患者であり、この症例を通して「なれ」の怖さを痛感した。言い訳になるがガンが深層部のために触れることが不可能であった。

他の病症から判断出来なかったのか大いに反省した症例である。

東洋医学の病理感に「内傷無ければ外邪入らず」とある。

これは7ジョウの乱れとのみ解釈しておりましたが、臓が侵される〔陰虚〕事により発症したものであることを今回初めて理解した。

現在、大河ドラマで「宮本武蔵」を放送しています。師匠を持たない我流の剣ではあるがいざ決闘となると流派や知識は無用となり、干拓事業や彫刻、書などから体得した何ものが宮本武蔵を救う場面が随所に出てくる。

臨床においてもそのとおりでそれまでに得た知識と経験と勤による部分が私の治療の実体です。臨床は生き物ですので、漢方鍼治療においても大枠のマニュアルか指導書は必要ですが、あまり細かく規定すると、その場に応じた「気」や「手」がうごかなくなるので「感じる手」を作ることが大切である。

以上

《参考・引用文献》

- 『金匱要略ハンドブック』 池田政一著 医道の日本社
- 『現代語訳・黄帝内経素問』 南京中医学院医経教研組編 東洋学術出版社
- 『現代語訳・黄帝内経靈枢』 南京中医学院中医系 東洋学術出版社
- 『やさしい中医学入門』 関口善太著 東洋学術出版社
- 『中医学の基礎』 平馬直樹・兵頭明・路京華・劉公望監修 東洋学術出版社
- 『中医診断学ノート』 内山恵子著 東洋学術出版社
- 『杉山流三部書』 東洋はり医学会編